人権・同和教育だより　　2026年10月 30 日発行

いっしょにいこうよ

香川県立香川東部支援学校
人権・同和教育部

「みんなちがって、みんないい」～それぞれのペースで一歩ずつ～

教頭　吉田　由実子

秋の深まりを感じる季節となりました。日頃より本校の教育活動、そして人権・同和教育への深いご理解と温かいご協力をいただき、ありがとうございます。「人権・同和教育だより」の冒頭にあたり、大正時代の童謡詩人・金子みすゞさんの有名な詩『私と小鳥と鈴と』をご紹介します。

私が両手を広げても、お空はちっとも飛べないが、
飛べる小鳥は私のように、地べたを速くは走れない。
私が体をゆすっても、きれいな音は出ないけど、
あのなる鈴は私のように、たくさんな唄は知らないよ。
すずと、小鳥と、それからわたし、みんなちがって、みんないい。



この詩のしめくくりにある「みんなちがって、みんないい」という言葉は、私たち大人にとっても、子育てや子どもたちとの向き合い方において大切な視点を教えてくれます。

４月より本校の教頭となり、私自身、日々子どもたちからたくさんの大切なことを教わっています。慌ただしい毎日に「少し疲れたな」と感じる時、校舎に響き渡る子どもたちの元気な声や、廊下ですれ違うときに見せてくれるとびきりかわいい笑顔、そして「教頭先生！」と人懐っこく駆け寄って声をかけてくれる姿に接すると、胸の奥がじんわりと温かくなり、すっと疲れが吹き飛んでいくのを感じます。子どもたちの存在そのものが、私にとっての何よりの元気の源であり、エネルギーです。

子どもたちは、一人ひとりが豊かな個性を持ち、異なる輝きを放っています。得意なこと、苦手なこと、成長のステップもみんな違います。日々の生活の中で、知らず知らずのうちに「他の子」や「標準的なペース」と比べて焦りを感じることもあるかもしれません。

ですが、詩にあるように、空を飛べる小鳥は地べたを速く走れません。きれいな音を鳴らす鈴は、たくさんの唄を知りません。それぞれ得意なこと、苦手なことがあります。子どもたちが「自分は自分のままでいい。」と安心し、周囲と比べることなく「ありのままの自分」を好きになり、それぞれのペースで一歩ずつ進んでいけるような毎日を、みんなが過ごせるといいと思います。

私たちは、子どもたちが自分のペースで安心して成長していけるよう、応援していきます。ご家庭でも、お子さんの成長をたくさん見つけ、たくさん褒めてあげてください。私自身も「みんなちがって、みんないい」という言葉を胸に、子どもたちの成長を一緒に喜んでいきたいです。

人権学習の様子

７月から９月にかけて全校児童生徒を対象に人権学習を実施しました。学部ごとに取り組んだ学習の内容と児童生徒の様子を紹介します。

○小学部○【「手伝って」「はーい」「ありがとう」】

今年はさぬき市の人権擁護委員さん以外からも５人の方がおいでて、計１５名で「おおきなかぶ」の劇を見せてくれました。最初に「こまったなあ、手伝って」「はーい」「ありがとう」のやりとりを練習して、子どもたちも孫役で参加しました。今年もたくさんの子ども達が一緒にかぶを引っ張ってくれました。フロアーの友達も「うんとこしょ、どっこいしょ」と応援してくれ、みんなの「思いやり」で、大きなかぶは抜けました。

最後に、みんなが楽しみにしていた人権あゆみちゃんとまもるくんが登場して、一緒に歌を歌ったり、写真を撮ったりして交流を楽しみました。

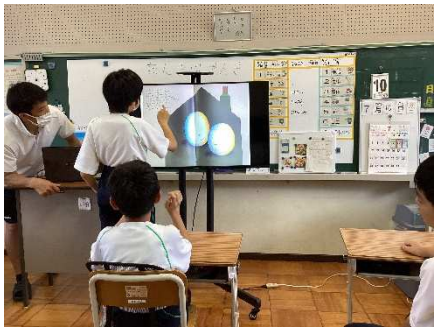


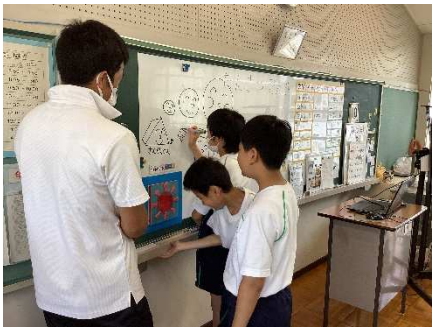


○中学部○【みんなの　じんけん】

中学部では、自分を大切にすることや、相手のことを考えることを目標に、学級の生徒に応じたテーマを選んで人権学習を行いました。

「友達の良いところを見つけよう」というテーマで学習をした学級では、「かっくん」の絵本を読んで、「ちがい」や「個性」について考えました。そして、みんなで新しいキャラクターを考えました。ミニくん、ダイヤマン、おにぎりくん、スライムくん、トントンくんなど、意欲的にたくさんのキャラクターを考え、ここでも、「ちがい」や「個性」のあることに気付くことができました。最後は「友達の良いところ探し」をしました。良いところを伝え合うと、とても心地良い空間ができることを実感しました。





○高等部○　【人権 LHR】



高等部では、各学級がそれぞれ工夫を凝らした人権学習を行いました。ある学級では、絵本「ねずみくんのきもち」を読んだ後、自分や友達の良いところを考えました。



「ふわふわ言葉で友達のいいところを見つけよう」をテーマに取り組んだ学級では、「○○さんは、走るのが速い」や「△△さんは、歌が上手」など、友達の良いところを発表すると、言われた友達が、とてもうれしそうな表情になっていたそうです。



パワハラやセクハラなどのハラスメントをテーマに授業を行った学級では、相手を尊重した言動をすることの大切さを学びました。職場での場面を想定し、外国の方が困っているとき、どのような行動をとればよいのかについて意見を交わし、相手を思いやる行動について、考えを深めることができました。

現職教育

７月２７日、丸亀少女の家の主席専門官　久保田耕平さんが「丸亀少女の家と少年院における人権」と題し、本校職員に向けてご講演くださいました。

丸亀少女の家の少女たちは、生活指導、職業指導、体育指導、特別活動等の矯正教育の他、相手に思いを伝えるアサーションや衝動性を抑えるためのマインドフルネスについても学んでいるそうです。

再犯の防止のためには仕事（学校）と帰る場所である住居が大切で、発達障害のある少女については、地域定着支援センターにつなぎ、出院後、福祉サービスが受けられるようにしているそうです。参加者からは、「発達障害のある少女への温かい社会復帰支援の、愛のある取り組みが素晴らしいと思った」、「教育と関りがあり、学ぶことが多かった」などの感想が寄せられました。

また、事後に「アサーションやマインドフルネスについて詳しく知りたい」という質問に対しても丁寧に答えてくださいました。少年院ではよく取り組まれているそうで、アサーションは自己開示、他者理解の態度を育て、自尊感情を高めることを目的に、講義やグループワークを行っています。マインドフルネスは、外部講師を招いて、瞑想を体験した後、体験発表をしたり、瞑想を宿題にしたりしているそうです。授業は和やかな雰囲気で行われ、職員と少年たちには笑顔が見られるそうです。



現職教育　新転任者研修

８月２６日、辛立文化センターにて、さぬき市人権推進課山田課長よりインターネット上の差別事象の現状や、辛立文化センター大髙館長より辛立文化センターの成り立ちや取り組みについて、お話を伺った後、奥田均さんの部落差別に関するＤＶＤを見ました。見た後、グループ内で感想や参考になったことなどを話し合いました。ＤＶＤを見ているときには納得できる言葉でも、いざ、人に伝えようとすると難しいことがたくさんありました。部落差別について学習したことを児童生徒に伝えるためにも、伝える練習に取り組む必要を感じました。また、「目に見える差別は少なくなっているが、差別される不安や心の傷は今でも重くのしかかっている。知ろうとしないことも差別であることが分かった。」「部落差別の問題には、社会の様々な課題を解決していくヒントが凝縮されていることが分かった。」等、感想が寄せられました。



第７３回四国地区人権教育研究大会（香川大会）に参加して

７月２日から３日にかけて香川県で開催された四国地区人権教育研究大会２日目の第２分科会「自主活動」に参加しました。

徳島県勝浦町立生比奈小学校からは、ハンセン病やいじめ、SNS などの人権課題について、事実を知り、自分の生活経験と重ねながら考える実践が報告されました。子どもたちが自分の「当たり前」を問い直し、友達との対話を通して考えを深め、自ら行動を選び取っていく姿が印象的でした。

高知県香美市立山田小学校からは、子どもの「やりたい」という思いを大切にした学級会や学校行事の取組が紹介されました。子ども自身が話し合い、計画し、実行する経験を積み重ねることが、主体性や自己有用感を育むことにつながっていました。

愛媛県立長浜高等学校からは、水族館部の活動を通して、生徒同士が互いの違いを生かしながら支え合い、「そのままでいてよい」と思える居場所をつくる実践が報告されました。安心して自分らしくいられる環境が、人とのつながりや新たな挑戦、成長につながることを学びました。

香川県立高松桜井高等学校からは、性別に違和感のある生徒の思いを出発点に、LGBT をはじめとする人権課題について学校全体で考え、多様な価値観を認め合う環境づくりを進めた実践が紹介されました。

人権教育は、互いの違いを認め、一人一人を大切な存在として尊重し、共に生きる力を育む教育です。今回の学びを生かし、子どもたちの思いを大切にしながら、誰もが安心して自分らしく過ごせる学校づくりを進めていきたいと感じました。

野嶋　裕子

第７３回四国地区人権教育研究大会（香川大会）に参加して

午前中は沢知恵さんによる講演「かかわらなければ～ハンセン病を生きた人のうた～」を聞きました。沢さんは生まれてすぐにハンセン病療養所のある大島と関わるという、香川県と縁のある方です。「人とかかわらなければ、苦しむことも、傷つくこともない。けれど、かかわらなければ、喜びも生きている実感も得られない」という大島青松園の入所者であった塔和子さんの言葉を考えることのできる講演でした。

午後からは第３分科会〈進路保障〉に参加しました。愛媛県土居中学校の先生は、自身が被差別部落出身で、その経験からの内容でした。このルーツを知らされた娘さんが、LGBTQ に関する授業を受けていたとき、「もしもそういう少数派の人に出会ったらどうするか」という質問を教師からされ、「マイノリティがその場にいないことが前提の質問」であることに怒りを覚え、「教師の学びを深める」必要性を報告者は感じ、このことに根気強く取り組んでいくとのことでした。

今年度は香川県開催ということで本校からも職員６名・保護者２名の参加があり、充実した研究大会になったのではないかと思います。

山形　千治

現地研修会に参加して

夏休みに、香川県高等学校教育研究会人権・同和教育部会第Ⅰブロック会の現地研修で大阪の釜ヶ崎に行きました。釜ヶ崎は大阪市西成区北部の萩之茶屋Ⅰ丁目から３丁目周辺を指す地名ですが、現在の地図に釜ヶ崎の記載はありません。行政や警察などは「あいりん地区」と呼んでおり、日雇い労働者の街として知られています。日雇い労働は収入が不安定なため、野宿生活と密接な関係があります。生活に困っていたり、野宿状態だったりする人たちへの支援活動を行っている「野宿者ネットワーク」代表の生田武志さんから話を聞きました。夜の様子をスライドで見たり、この地区を取材した番組の録画を見たりして、野宿の厳しい現実をわずかですが知ることができました。この後実際に外に出て、病院や炊き出しを行っている場所、簡易宿泊所などを案内してもらいました。スライドや映像に出ていた場所を見ることでこの町の様子をさらに深く知ることができました。

現地研修について、自分はあまり良いイメージを持っていませんでした。マイノリティ（少数者）とされる方が生活する場を訪れるというのは、何かしらの上から目線を感じるからです。しかしながら今回の現地研修に参加することで、それでも実際に目にすることは大切であるということを実感しました。人権・同和教育の研修でよく耳にするのは、「マジョリティ側（多数者）が変わらなければならない」という言葉です。変わるべきマジョリティの立場をしっかり頭に置き、現地研修に臨むことが大切であると感じています。

山形　千治

人権・同和教育保護者研修会

「言い伝え、迷信、これって本当」という題で、さぬき市教育委員会学校社会教育指導員松原伸二様より講演いただきました。グループワークで２人一組になって、「夜に爪を切るのはよくない」「女性は土俵にあがれない」「友引に葬式をしてはいけない」「北枕はよくない」など１４枚のカードを「そう思う」「思わない」「分からない」の３つの枠に分類していきました。分類するときには、お互いに考えを伝え合い、人権に対する考えを深める機会になりました。「けがれ思想」や六曜の考え、昔のしつけの言葉などいろいろな考えから言い伝えや迷信があります。それを「自分の判断の拠り所にするのは良いが、他人に押し付けるのは良くないこと」という話をしていただきました。







虐待防止教室

７月１０日、高等部３年団の１、２組は香川県障害福祉相談所の方を講師にお招きし、虐待防止研修を行いました。

日常生活で起こり得る虐待の場面を想定したロールプレイを行ったり、虐待を受けたときの対応の仕方について友達と考えを共有したりしました。

研修を通して困ったときには一人で抱え込まず、相談することの大切さに気付くことができました。

今回の学びを今後の日常生活や社会生活に繋げていきたいと思います。



